珊瑚は殺された

さいとう　みち子

長い長い坂道を下る。

左手では、
鬱蒼とした林から、
つくつく法師の大群が、
狂暴な猿どもの如く、
喚き罵り合っている。

あたしは左耳をふさごうとする。
だが左手は、
仕事帰りの鞄に独占されている。

右手では、
激しく流れる筋雲に散らされた
橙色の太陽が、
巨人のような不死山を、
絶望的に真っ黒く浮かび上がらせる。

あたしは右目を覆おうとする。
だがその右手は、
醜い日焼けを防ぐための日傘でいっぱいいっぱいだ。

晩夏が襲ってくる。

しかし、あぁ、

その行き場のない顔を上げてみれば、
天頂に、
珊瑚の死骸みたいな三日月が、
海の砂に擦られたコバルト色の磨り硝子の上に、
ひんやりと葬られていた。

だからあたしはにっこりと微笑んで、
ふさがった両手を振り回すようにしながら、
その青白い死相に大きく手を降ってあげた。

右手には猿が、左手には巨人が。